



猿のまがし抄

一

5  
2099  
1



頌送志抄

吟才幾度覺高情先  
哲遺編七部名與旨玄  
風難聞更憑君今日  
如通如  
正 辱交顯堂真

明治  
藤  
氏



志送志抄序

藤  
氏  
遺  
愛  
之  
記

自序一

此是若風雅手抄家造化乎  
志送志抄序友生見了而  
志送志抄序友生見了而  
志送志抄序友生見了而  
志送志抄序友生見了而  
志送志抄序友生見了而

利  
2.099  
卷一之

くは早舟や安しきるる歌  
か歌す夷歌の歌成出船  
し夫造化の心造化の  
つをよき蕉翁の風物乎し  
子歌の歌化をよむる歌  
たのこもなく唯自然成る外

自序二

か〜猿蓑を俳句乃古今集  
あま初学の名人去来する  
若よる書海乃俳句入海  
岩波集と猿蓑の歌をよむ  
な架けまの心ゆくは曲  
云らんる花梅の詩父節の古

是き一入子言賢乃一言成心  
志應如取能成海ふおきぬてき  
路も見ぬ何果越乃功志く進尔  
余情を操るる冬取乃机り年  
多きももしくして終ふりふい路ヤ石  
山者る夫を於権乃本のり光子

自序三

草子成扱て彼先と後人  
おのせり逆志抄と名つけさふ禮  
骨ふはのあまきまに能き事ふ興  
るつり志のり

于時文政十一年四月併書

榊村坊中然居士自序

蕉公羽の俳諧はおけなやこの道の  
杜子美はけしき昔子の俳は李白恥  
るさのらけ嵐雲を身は来るに心  
蓮丈草の淵明の風あり白は魂の令  
言外情あはれ架あるを七五の文字  
に尾をくはる人の解へる時あ

蕉公羽の俳諧はおけなやこの道の  
杜子美はけしき昔子の俳は李白恥  
るさのらけ嵐雲を身は来るに心  
蓮丈草の淵明の風あり白は魂の令  
言外情あはれ架あるを七五の文字  
に尾をくはる人の解へる時あ



くさるる一徳まみふらひ甚きもの風  
操りて人の徳とて雲泥の違  
ひあり強く解せんとせらば返て作  
こころを操りて徳とて一徳とて  
ふらむとてなまぬふらむ時ハ初世  
徳士の何とて一徳とて一徳とて

後三

教んマハゆくは解とてなまぬもの  
毛己の命に教ふ援萃するもの  
一教も全抄も終すものな一聞  
白也とて徳を撃つ猶その4  
とやひらるるもの故のあり  
一徳も全抄も終すものな一聞





るくははる大威すくはははの  
處よりをい白なるくはははは  
是はははの處ははははははは

あ免地乃くははははははは  
あはははははははははははは  
あはははははははははははは  
見はははははははははははは  
あはははははははははははは  
光はははははははははははは

三人は女もたふらふも大なる心  
骨もやう新きあしと振る好  
先く解情の意ハ備ふあり  
今や白毎子魂のりぬけ  
多敷人も知らぬ家も去る頃

さやくも忠誠の下のえは  
禱子結ひぬく世抄示魂聖  
入りの絳成示さききらるるを  
洪井梅里と共いひ致く  
因門の魂お歩んと梓小

忠烈公序大如魂の人

并ふ書行ね

又好乙丑を春 榊徳

猿蓑集百十五人

芭蕉公羽

姓平氏松尾名桃青伊賀國柘植郷赤坂の産  
 初名を宗茂と号し又宗房と云同國上野城代藤堂良  
 精嫡良忠と近仕す寛文六年秋二十三歳より仕  
 致し洛の北村季吟翁に遊學し歌連の温良を探り友  
 人北向雲竹の筆意を學び後一風を為す延宝六年江  
 戸より来り深川長慶寺佛頂和尚に參禪す後芭蕉菴桃  
 青と稱し一風の俳諧を興立す元禄七年冬十月十二  
 日大阪の寓居より寂す時年五十一也江州粟津  
 義仲寺に葬る其角より終焉記改書す

其角 榎本氏江州膳所候の醫師堅田の産東順の子  
 少く晋子其角と号す儒を服部平助受け醫草刈三越と  
 号す儒を服部平助受け醫草刈三越と

学ハ書ハ佐ク玄龍ノ小学ニ入リて後一家をシ子シ畫ハ俳友曉  
雪子一蝶ノ小学ニ詩ハ并ニ易学ハ鎌倉大巖ノ和尚ノ小学ハ初  
名ハ螺舎ト号シ蕉翁ト一ノ高足ト一ノ三百餘人ノ  
門人角ヲ上ニ立シのハ性活達ト一ノ言行ハ酒  
落也好酒李白ノ風韻ヲるルヤハ世ニ放蕩ト称ス  
ハ誤也室永四年二月廿九日没行年四十七麻布二本  
榎上行寺ノ

### 嵐

服部氏淡州小榎並村の産ニて幼名ハ久馬助  
と云長シて東都に遊ビ新庄隱居候ニ仕ヘ又并  
上相州候に仕シ彦兵衛ト称シ俳名ト治助ト云後嵐  
雪ノ改メ雪中菴ト号シ隱遁の後禪ヲ学ブ宝永四年  
三月十三日五十七歳ニ一ノ卒ス駒込  
常檢寺に葬ス蕉門文学ノ一人也  
向井氏名義香俗称平次郎肥前長崎ハ産ニて  
彼地聖堂祭酒ノ氏族世々儒を業トと云父向井玄

### 去来

傳二

勝京師に至りて禁中の醫官ト多シれテ去来亦兄ニ隨  
て京師ニ至り某の殿下ニ仕シ兼テ啓学ハ長シ詩歌  
をシ射術ニ妙ト得テ了スハ詩六ハ誅ハ武ハ  
業トすル書ヲ落柿舎ハ嵯峨ノ別業ト号シ室永元年  
甲申ノ秋九月十日卒東山真如寺ニ葬ス中華蕉門ノ  
高弟ト称スヤリ此集ノ撰者也春秋五十三歳

### 丈艸

内藤氏尾州犬山長臣壮年武を辞シて出家シ江  
州松本の山上ニ隱ル嘗テ詩作ヲ嗜シ石川丈山  
風操ヲ慕テ自ラ丈草ト号シ去来ト許シて蕉翁ト  
謁シ夫ノ俳諧ヲ学ブ其角嵐雪去来丈艸ニ蕉  
門ノ四哲ト称ス後龍岡ニ関關シて出スるル三年常  
に法華經ヲ讀誦ス室永元年二月廿四日卒年四十四  
龍ヶ岡ノ佛  
幻菴ト称ス

### 允兆

加列ノ産醫を業トしテ洛ニ居リ蕉門頗ニ騷客也  
あノ撰集ハ去来ト共ニ名ヲ未詳

乙州

江州大津に住す名字  
事跡可俟後考

千那

江州堅田本福寺住職妙式上人  
稱を嘗て律師小任を蒲藪坊と号す  
出羽國坂田の人醫家業とす通称

不玉

伊東玄順淵菴と号す  
河合惣五郎と稱す祖翁元禄二年奥羽行脚に山

曾良

川道路朝夕の勞をたらく其旅行の始剃髪一惣  
五改て宗悟とす  
奥細道に見へたす

杉風

俗稱鯉屋藤左衛門と云東都官魚屋ふして小澤  
ト尺一族蕉翁助力の門人也享保年中九十有

嵐蘭

松倉氏甚右衛門と稱す肥前島原古城主の裔也  
母ハ田中宗夫と孫にして嵐蘭亦外祖の武を継  
採茶菴と号し小田原町に住す  
余歳ふして卒筑地本願寺々中ニ葬り杉山氏

千里

八月廿七日卒す谷中感應寺々中ニ葬り  
又知利と書す江戸に住す大和葛城郡竹の内産  
名字未詳貞享元年翁は随て古郷に至る其時

付三

荷兮

尾州名古屋の住檀木堂と  
号す曠野集の撰者也

越人

の人名名字未詳  
姓越智尾州名古屋

李由

江州平田遍照寺の住職亮隅上人と号當寺十四  
世也買年と稱し四梅廬と号室永二年六月廿二  
日四十五歳

路通

濃州の産大坂に住す  
八十八村氏

路通

濃州の産大坂に住す  
八十八村氏

北枝 立花氏加州小松の産金澤小住立花牧童、弟也

露沾子 奥州岩城々主内藤左京亮義泰、能名風虎、因

蟬吟 伊勢津候の長臣伊賀上野城代藤堂新七郎良精

探丸 蟬吟の弟也、蟬吟世に早す

杜國 名字未詳三河國保美村の産、蕉翁芳野行

曲水 江州膳所侯の長臣菅沼外記、稱す曲水後其

風麥 野の藩士也

土芳 服部氏半左衛門、稱す

尚白 大津の人、江左三益、稱す木翁、号、

木節 大阪の人、醫、業、

郊七 向井氏長崎の人

魯町 同上、名字

山店 江戸の産、石川氏

北親 弟也

北親 弟也

北親 弟也

北親 弟也

遠水

江戸の人樋口氏五郎  
兵衛町に住す

普船

江戸の産佐保氏甘雨亭と号、後介我と称す享保三年六月十八日卒、春秋六十七歳、浅草本願寺中

等光寺小  
葬

山川

江戸の産名字未詳其角、門人也角、筆意を学花つゝ集らば山川、清書たる可、雑談集より出

巖翁

江戸の人也其角、親友以下名字未詳、龜公羽、岩翁の子也

全峰

江戸

花紅

全

溪石

全

卜宅

全

巴山

全

宗次

全

落梧

全

揚水

全

元志

全

嵐虎

全

嵐推

全

素男

全

柳陰

を尋し中見一  
より同人、

等哉

奥細道小越前福井  
子隠士等載と云人

竹戸

美濃

如行

全

子尹

全

史邦

京

暮年

長崎

烏巢

三河

塵生 野童 桃妖 猿雖 良品 示蜂 祐甫 槐市

加州小松

加州山中俗稱  
泉屋久米之助

勾空 長和 百歲 車來 半殘 須琢 万乎 杜若

全金澤

以下伊賀連衆  
名字未詳

少年

卓袋 一啖 水同 澤雉 石口 長眉 一桐 裾道

魚日 木白 配力 園風 利霄 式之 昌房 盡好

以下膳所の  
俳士



杉峰	羽笠	且藁	朴水	泥土	蟬鼠	探志	游力
		以下尾張 名古屋					
野水	薄芝	芥境	正秀	怒誰	支幽	及肩	里東

傳七

遊女	坂上氏	田上尼	智月尼	珍碩	何處	之道	全
東都新吉原茗荷屋名妓歌俳香茶小長 最能書の聞へ世々知処也其産に因	津國山本	去来 <small>姪也</small> 長壽	大津乙州 <small>母也</small>	江州湖南	大坂		
	扇 <small>膳所</small>	菽子 <small>伊賀</small>	羽紅尼 <small>京凡兆</small>				
		午子 <small>京向井益寿院法印 元丹<small>女元桂</small>妹</small>					

て名付しとかや

集採共計一百十五家  
 句選統載四百十八吟  
 歌仙四卷百四十四句  
 幻住菴記 并詩

猿蓑逆志抄卷之一

晋其角序

晋子其角は集の序を書き祖翁新風興立てて末代蕉門の  
 龜鑑とて名をたすの尊法凡北撰志たるも一は祖翁於  
 骨の俳諧家子定まぬる乃集をよむは集令初の始末を今述  
 のしりては末代蕉門の心は才一の蓋奥にかけりては序  
 世抄とあり亦晋子序文の意を以て言外の旨を採り  
 以て考へたりて序文の意を以て既述して味を興へて尋考り  
 俳諧序文の難ありてはなほ注釈を以てして後学を指  
 標となすべし初学のものに於て抄外の旨を採りては  
 要するもの



俳諧の集はるる古今わたりてける  
のたれも起つる時をまや

此集採るは以て俳諧者流盛なりて宗鑑守武より貞徳  
宗因よりふりて宗因と今と移るなりて其六の時にあつて  
貞徳の遠くは宗因と今と移るなりて其六の時にあつて  
古今の俳諧は漢魏にして世道のたれも起る時をまや  
といふまゝの面起るは面目ありて今面目を  
る時しむるはあつて其六の時にあつて其六の時にあつて  
一 辱むる恥を受くるもの面を俯らるるをまやといふは面  
成起るの及理之辨道く云時の起るをまやといふはあり

長嘯子う拳白集ふ大和歌好まより大長まき妻社の名子ふ  
う思ふしつみおろしけりしむらうすもみはさけお母さ  
ありしん神は月夜もねりてお守へり時をまやといふ詞を  
取て書るなる也一 其六の俳諧の集はるるを今も古今の  
俳諧のたれも起つるは世道のたれも起る時をまやといふは  
起る也一 世に俳諧の興隆と稱讚の詞也

幻術の集はるる古今わたりてける  
のたれも起つる時をまや

幻術の字書に吞刀吐火植木植瓜の術は是也といふは  
ハ今乃子書きむをいふは又妖術飯綱も幻術也







ハこのるるりあるきと同ー 俳諧の及ハ夫より更なる  
仁義禮智信の五徳を養ひ育つる事ハいふまでも  
なく心せらるる心也也懲コラしたる心也也  
あるもの之といふ言ふたしなむといふ嗜好カニミといふ事  
あはれ家ハ心懸といふ義ありさしきといふ疑コラ  
といふるのハ何れけはよき事物ハ記シをとりて  
さあはれあはれ心懸といふ退け慎シとありなむといふ  
義ありて五徳の大なるいふ事いふは只己心とら  
さす事なり ちかるとなるいふ事いふは  
事ハなむといふ事あり 度ある事ハさあはれ仁義  
礼智信乃五徳をや ちかたてするの理眼あたりに記シ

キテ六

弄コウ小石の俳諧も蕉門の一風を禪の偈頌ゲ小傲コウ正心誠  
意の一助とるるを説けるも昔子西原酒を敬高コウ  
と云ふ譏るといふ昔子の昔もあはれぬ人のいふ事あり  
蒼一翁方一の門人大酒をハ敬コウと戒りし言コト行の西原コウお  
ひてハ一言半句の戒もあはれ又句の上もあはれ人  
も又五徳の説終したるを皆取まらぬ信西法師コウ娘  
舟の舟より上西門院の命婦の方へ送らるる影コウ人いふ  
いふの文字の信とて付さくもかきくりぬるといふ伊  
勢貞夫考り五ツの文字とハ仁義禮智信の五徳をいふ  
こととあはれぬ事あり孔子乃温良恭儉讓乃五徳  
といふハ多コウ一ハ五徳ハ孔子の外ハ一人も備へぬと云ふ

仁義禮智信の表へ何れをもして見せる如く温良恭儉讓を  
其六孔夫子の教余人の備ふる事も亦これに在りて其徳は  
及んば人としてあつてもや又徳えり能く其徳は五ツの徳行とい  
ふ事奉てけむ徳ありとてつるも何れも其徳に

彼西行の人此骨ふる人を作らして其高き  
りてさへも笛を吹やうふらん侍るといふれ  
るも人年ハ半て侍るも其の意の已らる  
き保ハ友魂乃法のとりてふ侍りや

かの西行上人のい探集抄上人言聖の奥へ行て志  
たしくかゝるい聖の宗へまをさる後累同くうそ

をいふも母の情をもわらまらん友も無くさへ  
た夢又先き夢とていほりて遣て侍る人のいふ  
侍りかゝる危も何れもさへかゝる侍り夢を  
徳のありていふ人も心うのいふ侍りも  
もかくもいふ侍るもいふ侍るもいふ侍るも  
むもいふ侍るもいふ侍るもいふ侍るも  
いふ侍るもいふ侍るもいふ侍るもいふ侍るも  
魂の入るのいふ侍るもいふ侍るもいふ侍るも  
彼身ハ何れもいふ侍るもいふ侍るもいふ侍るも  
色も何れもいふ侍るもいふ侍るもいふ侍るも  
成生するも死物ゆして生る人のいふ侍るも



出—心情の通つる所の人々心成動るるの勢ハ何れんば  
—として吹破りて換—る角の中くハ律ハ合ぬや  
—とて言成而て文成つて言さるる角成以やうかまん  
—ハ作りし言多死物と活物の分あると言ふ—  
—の文之ハ成て付ともいふ言成文の眼的ハ—  
—ホと西行上人の—言成作りまする人の形ハ  
—何とて仁義礼智信の魂と養育する言成—  
—たき五音の—言成言成言成言成言成言成言成  
—ハ物入る言成言成言成言成言成言成言成言成  
—言成言成言成言成言成言成言成言成言成言成  
—の言成言成言成言成言成言成言成言成言成言成

キルハ

心成動るるの言成言成言成言成言成言成言成  
—も春和の機端もよく目前の言成言成言成言成  
—入る言成言成言成言成言成言成言成言成言成  
—の言成言成言成言成言成言成言成言成言成  
—はれ言成言成言成言成言成言成言成言成言成  
—五七五乃言成言成言成言成言成言成言成言成  
—魂の入る言成言成言成言成言成言成言成言成  
—鬼神とも感動り—言成言成言成言成言成言成  
—人界ハ生言成言成言成言成言成言成言成言成  
—山言成言成言成言成言成言成言成言成言成言成  
—言成言成言成言成言成言成言成言成言成言成

う方か引くけて世乃中か悟らまうとさる。通一と云ふ六下り  
いふ所の魂や文章ふ力と入てけ座ノ文の魂がこゝろくも  
五ノの字のヨクまするはと五音の傳をいふがまはまを  
かんとりか又五徳のあへ引くけて書るんと云ふ通一と反  
魂の法といふ探集抄の詞をついてかのは魂の術を成日字  
く何といふか文とわくもるん術にたてと訓を法もたてと  
訓を同意之は文章より古るもの文章と取て文を成る  
義成通ずるの如くおろそくとわくもるんといふか文のあがり  
やうかしてまよぬおろしき意の字かて又一段の文章にて  
これより終ると又一段都會と伝の序文也文章ハ伝の  
かたつ所をよくまよぬ

さねいたす一おれ入きまハアイウエラ  
よくひまをいふか舞のたすも生か  
通一

さるはとハ上成文下をたさるの詞かてたのぬくまれ  
いふか義か同く魂の入るはとら向き魂の入て  
姿情を突まをこもたらはといふ義ハアイウエラと  
日本五韻の惣本よりして是より五ノ韻も生ずる  
か義もけ五音よよく通まをハかふか義な一と通則  
上より下への五の音のけ五の音とよくまよぬ  
まよぬ

さいのきけむ音千通し〜とむ〜と惚日を空に  
 たまひりたるんぬらむ名自ま向も吟し  
 出さる〜しりふま〜今昔六文字の外も言ふ  
 乃きり何〜と〜と千一句の情もあつて成り定辨句申  
 のゆみ説し成りて名無〜漢文或ハ詩句事と  
 會しゆび成り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 といゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 け管といふ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 る〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

只俳諧を魂乃入〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

千原十

翁行脚の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ぬと猿々小若衆と着せり 俳社此種  
 我入〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ね〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 幻術なる〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

只惚け小魂の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 といふ下〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ぬまの〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 小若衆と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 志〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ハア感も生ずて魂の入るる言句一々巧つとを  
凡人之感動してぞようふりてを其誠を為  
のけりて聖きしておるる魂一と云ふとむる  
是は何れも凡人之感して感動はるるをあれども  
俳句の句は魂のいふるよりいふる言句は魂  
あけを六句典よりいふる言句一神の字もたす  
をいふる神魂と熟字より家もいふるた  
すいふる魂の精なるその神なりといふ  
たちまち断腸の思ふを叫ぶ猿もよる文章をよ  
うけらるる古詩の猿のありをすて悲哀は催はるる  
を作するやうに江湖集介石朋禪師靈隱聽猿

得頌此心未歇最關情那更猿聲入夜頻從此  
飛來峰下寺又添多少断腸人とつと古歌曰  
巴東三峡巫峽長猿鳴三聲淚沾裳荆かなごいつと猿  
客猿の啼成すて愁悲と催はるる古詩よりいふる  
断腸と悲哀愁傷の切なるいふ腸もすくふ切なる  
こといふ猿も小猿成をいけといふ句のいふる幻  
術よりよつて魂をよつて忽ち猿の寒がる形も眼を  
岩の下小いづる猿もいふる悲しむる啼聲  
も出らるるいふる猿もいふる猿もいふる猿も  
も其実ハ其の言句ハ魂のいふる言句ハ人々を感動せし  
むると讚美ししと形容假借しと書る文章なりと

志の強し一<sup>つ</sup>つふ<sup>つ</sup>懼る<sup>る</sup>るを<sup>を</sup>幻術<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ハ<sup>ハ</sup>何<sup>の</sup>ぞ<sup>の</sup>ハ<sup>ハ</sup>山<sup>の</sup>豆<sup>の</sup>  
と<sup>と</sup>子<sup>の</sup>意<sup>の</sup>中<sup>の</sup>に<sup>に</sup>た<sup>た</sup>ハ<sup>ハ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>モ<sup>モ</sup>ア<sup>ア</sup>モ<sup>モ</sup>之<sup>之</sup>何<sup>の</sup>カ<sup>カ</sup>キ<sup>キ</sup>ル<sup>ル</sup>越<sup>の</sup>す<sup>す</sup>幻術<sup>の</sup>  
何<sup>の</sup>カ<sup>カ</sup>ハ<sup>ハ</sup>幻術<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>び<sup>び</sup>く<sup>く</sup>文法<sup>の</sup>す<sup>す</sup>文詞<sup>の</sup>ハ<sup>ハ</sup>力<sup>の</sup>と<sup>と</sup>入<sup>入</sup>  
作<sup>の</sup>る<sup>る</sup>これ<sup>の</sup>別<sup>の</sup>ア<sup>ア</sup>イ<sup>イ</sup>ウ<sup>ウ</sup>エ<sup>エ</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>の<sup>の</sup>名<sup>の</sup>着<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>家<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>  
に<sup>に</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>句<sup>の</sup>の上<sup>の上</sup>も<sup>も</sup>文<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>ある<sup>る</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>漢文<sup>の</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>  
ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>け<sup>の</sup>書<sup>と</sup>を<sup>を</sup>用<sup>ひ</sup>ぬ<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>

これ<sup>の</sup>元<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>此<sup>の</sup>集<sup>を</sup>をつ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>特<sup>に</sup>  
の<sup>の</sup>ハ<sup>ハ</sup>名<sup>の</sup>符<sup>を</sup>す<sup>す</sup>を<sup>を</sup>見る<sup>る</sup>見<sup>る</sup>る<sup>る</sup>序<sup>の</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>ね<sup>ん</sup>  
と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>魂<sup>を</sup>合<sup>は</sup>せて<sup>て</sup>去<sup>す</sup>来<sup>す</sup>凡<sup>の</sup>兆<sup>乃</sup>は<sup>は</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
み<sup>み</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>せて<sup>て</sup>書<sup>す</sup>

これ<sup>の</sup>元<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>六<sup>の</sup>書<sup>の</sup>既<sup>に</sup>終<sup>る</sup>暮<sup>の</sup>の<sup>の</sup>句<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>る</sup>序<sup>の</sup>  
も<sup>も</sup>何<sup>の</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>書<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>に<sup>に</sup>五<sup>の</sup>行<sup>の</sup>も<sup>も</sup>ア<sup>ア</sup>イ<sup>イ</sup>ウ<sup>ウ</sup>エ<sup>エ</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>の<sup>の</sup>五<sup>の</sup>音<sup>を</sup>  
も<sup>も</sup>じ<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>ハ<sup>ハ</sup>孔<sup>子</sup>家<sup>語</sup>云<sup>云</sup>五<sup>の</sup>為<sup>音</sup>主<sup>主</sup>獲<sup>故</sup>獲<sup>五</sup>月<sup>而</sup>生<sup>生</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>孝<sup>を</sup>養<sup>ふ</sup>て<sup>て</sup>出<sup>す</sup>る<sup>る</sup>文<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>心<sup>を</sup>合<sup>は</sup>せる<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>  
越<sup>す</sup>て<sup>て</sup>魂<sup>を</sup>合<sup>は</sup>せる<sup>る</sup>と<sup>と</sup>書<sup>す</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>魂<sup>の</sup>の<sup>の</sup>入<sup>り</sup>ぬ<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>  
句<sup>の</sup>の<sup>の</sup>ハ<sup>ハ</sup>肝<sup>の</sup>要<sup>の</sup>の<sup>の</sup>ハ<sup>ハ</sup>六<sup>の</sup>書<sup>の</sup>を<sup>を</sup>示<sup>す</sup>さん<sup>も</sup>の<sup>の</sup>魂<sup>と</sup>い<sup>い</sup>  
字<sup>を</sup>か<sup>か</sup>して<sup>て</sup>書<sup>く</sup>ぬ<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>狂<sup>者</sup>を<sup>を</sup>志<sup>の</sup>鳥<sup>の</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>識<sup>る</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>文<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>仁<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>  
符<sup>の</sup>の<sup>の</sup>遠<sup>く</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>仁<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>禮<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>智<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>信<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>  
五<sup>の</sup>徳<sup>の</sup>を<sup>を</sup>書<sup>く</sup>ぬ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>仁<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>禮<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>智<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>信<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>  
ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>物<sup>の</sup>の<sup>の</sup>情<sup>の</sup>を<sup>を</sup>通<sup>じ</sup>ぬ<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>甲<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>乙<sup>と</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>魂<sup>の</sup>の<sup>の</sup>骨<sup>を</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>人<sup>の</sup>の<sup>の</sup>形<sup>を</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>人<sup>の</sup>の<sup>の</sup>姿<sup>を</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>る</sup>も<sup>も</sup>五<sup>の</sup>徳<sup>乃</sup>魂<sup>と</sup>

ちりれに滅の人といふべし... 俳諧吟の多し  
 ありげ世にほく人の方のくも何れの人あかきあ  
 るるもたのふとも生きたるは死人を死後のやつと  
 とちのめやうと成る世間をかけて教戒せしむる  
 の序文小石の俳諧も正心誠意のこころしやうせき  
 日月の歌弄俗語平話の野鄙人情の草書西の  
 庵んりしとて進んで首尾の大意を書つて終る序  
 文こと浮く味や舞いけあふまうを書くとそ  
 向の首尾は明かして書り又芭蕉葉船といふ書り  
 猿の集の序は昔子名をうけて実の翁乃橋ことし  
 或又いふと実の翁の自筆に彼も向雲外とていふ

して昔子名といふことしりされど山猿葉集全  
 部正作の浄書ふして本草の漢文の跋尾も正作書し  
 と記せり正作は昔子門人なるも六を正作の昔子名といふ  
 よりのもえ昔子の祖翁の高弟よりして三子の徒名もい  
 人の上へ出るものなりとやされ昔子の学力俳句振群  
 にして庸人の乃子とて石元集の句成りてある  
 終るし容易に解るるもあはれ人のかくれぬ  
 序文は昔子なるも人の強まるもやんや何の心か昔  
 子の及くさる文なりや祖翁乃文なりや蕉翁の四  
 才のハ蕉翁の蕉翁もみちして山文のそとに  
 名を昔子なり昔子あはれとてははして蕉翁の俳力をお

其の罪々々々——四才子のふも文才俳腸の居士  
流名東許六小枝李由支考ま就て余も糞多し  
根も甚多翁の稿さうくハ首翁乃末流と濁るとのさう

猿蓑逆志抄巻之一終

